

御退職される二先生を送る

国際関係学部長 三橋秀彦

国際関係紀要第 32 巻第 2 号は、期せずして共に学部長を経験された永綱憲悟、江川美紀夫両先生の退職記念号である。学部長として巻頭の送る言葉を綴るなら、それは国際関係学部のその時々課題に対して取り組み、学部運営に尽力された両先生への敬意と感謝の言葉に尽きる。

永綱先生は東京大学法学政治学研究科博士後期課程修了後、1984（昭和 59）年に経済学部専任講師として本学に着任され、1990（平成 2）年に国際関係学部が開設されて以降は「政治学概論」「比較政治論」「現代政治学」など政治学分野で主導的役割を担われた。2010（平成 22）年には学部長に就任され、特に 2012（平成 24）年の多文化コミュニケーション学科の開設では学部長として企画、交渉、運営すべての面で卓越したリーダーシップを発揮するなど、今日の国際関係学部の 2 学科体制の礎を築かれた。江川先生と共に本学部の前身である経済学部国際経済学科をご存知の最後の世代でもある。このため学部の方向性、組織運営のあり様等多方面で先生の薫陶を受けた教員は多く、2021（令和 3）年からは学長として大学運営の陣頭指揮を執られている。

「行動力あるアジアグローバル人材」。これは先生の造語である。「世界一楽しい学科」をスローガンに掲げた多文化コミュニケーション学科は初年度受験生からも好感をもって受け入れられた。「行動力あるアジアグローバル人材」は当時文部科学省が募集していた「グローバル人材育成推進事業」に

応募する際に掲げた理念である。単に「グローバル」として国際教育を掲げただけでは当該分野の伝統校ひしめく東京にあって埋没し、他方アジアだけでは「グローバル人材」の趣旨とは異なってしまう。それは大胆に両者が接合され、誕生したコンセプトである。その大胆な融合精神は申請時に必要とされた TOEIC 目標値の設定でも示された。当時学部が掲げていた「TOEIC600点100%」の目標を、申請書の提出近くになって学部長判断で瞬時に「TOEIC700点30%以上」に書き換えられたのである。それは英語教育において実績のある他大学と遜色ない数値を掲げ、かつ本学の「専売特許」であるアジアをスパイスとすることで、AUAP など本学が20年以上に渡り地道な努力を積み重ねてきた国際教育に対し社会的注目を集めるための巧みな戦略であった。ただ先生の尊敬に値すべき点は単に目標を設定し、関係者に方向性を示しただけではない。特に英語やキャリア教育では現場に入り、自ら TOEIC にも挑戦された。教師の役割が学生に自信を与えることにあるとするなら、その時の得点は余りにも高いものではあったが、共に教育に当たるその姿勢は確実に学生、教員を鼓舞した。

先生の巧みなスローガン設定（好き？）は先生の専門がロシア研究、特にそれが初期のソ連の研究にスタートしたことに関係していると秘かに思っている。一見すると自家撞着の感もあった「アジアグローバル人材」は今では「アジアからグローバルへ」として洗練され、「世界一楽しい学科」は「アジアと共に、楽しいキャンパス、面白授業 一挑戦を続ける大学」と今日の亜細亜大学の指針となっている。

江川先生は早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程修了後、1985（昭和60）年に経済学部にて専任講師として着任された。本学部開設後は「経済学概論」「経済政策論」「日本経済と世界」を担当し、国際関係学部の学生に対して世界経済を理解するためにも日本経済を学ぶことの重要性を説かれ続け、2014（平成26）年からの4年間は学部長を務められた。

先生について特記すべきは、本学部で過ごされた32年間中の12.5年もの間、執行部のメンバーとして学部運営に当たられたことである。学部長以外

にも経済学部を含めると教務主任3回、教務主任補佐3回と学部が難しい問題を抱えるたびに執行部入りを懇願され、先生の人望と手腕とで学部はその時々の難局を乗り越えることが出来た。「困った時の江川さん」という言葉を耳にしたことがある。このように同僚から寄せられる信頼の高さから、先生は文字通り白羽の矢が立ち続けた教員生活を過ごされ、執行部での長年の経験は学部長としての4年間に遺憾なく発揮された。

江川学部長時代に多文化コミュニケーション学科の教務主任を努めた私にとって、実は先生が学部長としての鑑となっている。2018年に国際関係学部は両学科の定員の付け替えを行った。それに先立つ2016、17年の2年間は学園との調整の連続であった。「殴り込みに行ってくる」。江戸っ子である先生は大学上層部との交渉をよくそう例えられていた。学部の通常の業務は両教務主任に委ね、「殴り込み」と例えたくなる難しい交渉は全て自ら引き受ける。良識に由来する判断の正しさとそのバランス感覚はその場に立ち会えた者だけが判るものかも知れない。

「創業は易し守成は難し」との言葉通り、AUAPの費用の値上げ、「グローバル人材育成推進事業」の終了など、先生の学部長時代はそれまでの学部の柱が一挙に見直しを迫られた時期でもあった。先生はそうした厳しい環境変化にあってリーダーとして粘り強く対応されただけでなく、更には学部長の業務として最も難しい判断を要す人事でも積年の課題に対してその能力を遺憾なく発揮された。それはまさしく先生の経験とその誠実な人柄に寄せられた信頼の故に可能であったと言ってよい。

研究者としてケインズ主義の今日的意義や新自由主義に対する一貫した批判姿勢などは著書である『日本型経済システム—市場主義への批判』でも強調され、人に対する優しいその姿勢は先生のゼミ教育における「江川方式」でも示された。

両先生の御退職を以て、本学部から学部開設当時を知る教員はいなくなる。学部創設以来、常に国際環境の変化に対応し、学部長として時々の難局を乗り越えられた両先生に対して敬意を表し、それを以て送る言葉としたい。